

## 令和2年度 第2回 知事広聴「平太さんと語ろう」 記録

【日時】 令和2年11月18日（水）

午後7時00分～午後8時15分

【会場】 三島市民文化会館 小ホール

### 1 出席者

- ・ 発言者 三島市・函南町において様々な分野で活躍中の方  
4名（男性2名、女性2名）
- ・ 傍聴者 100人

### 2 発言意見

番号	分野	項目	頁
発言者1	農業振興	地域循環型農業のブランド化	2、14
2	地域活動	地域子ども食堂の活動	3、14
3	地域防災	消防団活動を通じた地域貢献	6、14
4	移住定住	静岡県に移住政策への提言	7、16
傍聴者1	—	丹那のメガソーラー建設計画	17
2	—	外国人労働者の子どもの教育支援	18
3	—	丹那のメガソーラー建設計画	21

【川勝知事】 皆様こんばんは。今日はコロナ禍の中、お越しいただきまして誠に恐縮でございます。午前中の感染者は60名、現在は86名ということで、今年になって最大の感染者数が報告されている中でございます。従いまして皆様方も、マスクをお召しになって、感染に気を付けながら、よろしく願いいたします。

この広聴会は、私の話をするのではなく、皆様方のお話を聞いて、それを政策に活かす場でございます。全て記録して、仮にこの場で答えられない場合には、必ず後日、その点につきましてご回答申し上げるという形で、今まで70回やって参りました。通常、お昼にしていますが、お昼ですとお勤めの方が出て来られないということで、議会でご指摘を受けまして、夕刻にするようになって3回目ということでございます。

今日は水の都、三島で、文化会館も面目を一新した感じですね。先ほど文化功労者の絹谷幸二先生の素晴らしい絵を見せていただきました。また、函南はゲートウェイということですね。

来年は、オリンピック・パラリンピックがでございます。再来年1月からは、大河ドラマ「鎌倉殿の13人」が放送されますが、第二代執権、北条義時の生まれ故郷が伊豆の国市だということで、今日は、東部20市町の首長、観光協会、商工会など関係者の方々が集まりました。オリンピック・パラリンピックの後は、文字どおり歴史の世界、文化の世界に入って行くということで、ますますこの東部地域に、いろいろな形の、言わば、応援の風が吹いているということでございます。

そうした中、今日は若い方が4人、それぞれ函南からおふたり、三島からおふたり、男女共同参画でおふたりずつお越しいただいております。しっかりお聞きして、これを東部全体、特に函南や三島のためになるように、施策に活かしていきたいと思っておりますので、短い時間でございますけれども、どうぞよろしくお願いを申し上げます。

【発言者1】 私は函南町丹那で農家をしております神尾ファームの発言者1です。野菜ソムリエ協会認定野菜ソムリエプロとして、また、函南町ブランド「函南めぐり野菜」のアンバサダーとして活動しております。地元の企業、酪農王国オラッチェ様と、地域の資源、完熟牛ふん堆肥を利用して野菜を育てる、地域循環型農業をブランド化する取組に参加させていただき、函南町ブランド「函南めぐり野菜」の名付け親になり、野菜をブランド化することができました。丹那という寒暖差のある気候を利用し、自然豊かな地で露地栽培で野菜の旬にこだわる、そんな野菜づくりをしております。

また、私は、今年、日本一の野菜ソムリエを決める野菜ソムリエアワードで日本全国に約6万5,000人いると言われている野菜ソムリエの中で、2位の銀賞をいただくことができました。野菜ソムリエは、生産者と生活者のかけ橋となることを目標にして活動しております。私は農家の野菜ソムリエとして、私スタイルの活動で、野菜の素晴らしさをたくさんの方に伝えたいと思い、SNSや、レシピの提案、テレビ、ラジオ、小学校での食育活動を通して、また直売所で直接生活者の方にお話をし、野菜の素晴らしさを伝えています。そういった活動を評価していただき、たくさんの方にご支援いただきまして、この賞を頂くことができました。農業が命をつなぎます。そして、人をつなぎます。活動しているうちに、私はその素晴らしさを感じました。農業の素晴らしさを次世代へつなぎたいと、活動しております。

これからは、丹那の自然豊かな地へ、たくさんの方に農業体験をしに来ていただいたり、また、子育ての間の空いた時間に農作業を手伝っていただけるような女性の雇用をしたり、都内への函南町の野菜の販売や、また、破棄するような野菜が出たら、それを必要とする方に届けるような活動をしていきたいと思います。農業で地域を活性化させ、地域で農業が活きている、そんな函南町を目指したいと思っております。ご清聴ありがとうございました。

**【発言者2】** こんばんは。三島市で、地域子ども食堂の活動しております、「みんなの笑顔 おたまちゃん食堂」代表の発言者2と申します。よろしく願いいたします。おたまちゃん食堂は、地域子ども食堂を立ち上げ、4年目に入りました。「食べることは生きること。生きるとは食べること。」を合言葉に月2回の地域子ども食堂を、今はお弁当の配布で行っております。毎月いろいろな方からのご支援によりお力をいただいております。毎月いろいろな問題点も見えてきました。

子どもたちの見えない貧困、子どもの自殺願望、大人を怖がりおびえる子ども。様々な子どもたちがいます。そんな子どもたちでも、誰でも差別なく来られるように、おたまちゃん食堂は窓口を広くしております。初めは、子どもたちに食事を提供していく流れでしたが、子どもたちのそばには必ずお父さんとお母さんの存在があります。そして、子どもの安定を考えるのであれば、子どもと同時に、お父さんとお母さんへの寄り添いも必要なことが分かりました。おたまちゃん食堂では、子どもの様子と同時に、お母さんの話も聞き、信頼関係を作っています。県内でも、子どもたちが悲しい出来事に巻き

込まれることも少なくありません。でも、そこで親ばかりを責めるのではなく、いち早く見つけることができたなら、子どもたちもつらい思いをしなくて済むのかな、とも思っております。今、特にこの状況の中で、お父さんお母さん、すごく頑張ってくれています。本当でしたら、出産後、子どもが3歳になるまでは、お母さんと一緒にいられる子育ての町ができるといいなという感じで思っております。

支援を始めて4年目に入りますが、多分、支援を頑張っている方々にとって一番壁になっていることは、場所の問題だと思います。少しの時間でもいいからみんなの役に立ちたい、何かをしてあげたい、でもそのきっかけがない、場所がない。そういう話をよく聞きます。県や市町などが、空き家を無償レンタルするなどの制度があると、もっともっと身近で子どもたちを助けることができるのではないかなと考えております。

子どもたちの食に関する問題点は、おたまちゃんの中ではたくさんあります。子どもたちの好きなメニューを、お野菜を中心に作るのですが、その中で、食べたことがない食材や、食べたことのないメニューなどがございます。その時には、子どもたちに、少しずつ教えていくようにしております。そのような形で、おたまちゃん食堂では、皆さんが来られるように、窓口を広くとり、誰でも来てもいいんだよ、何かあったらおいでね、また来てくれてありがとうね、ということをお話をさせていただいています。

私たち、おたまちゃん食堂のメンバーは、皆さん仕事をしながら、民間で作り上げた団体です。市、県がバックアップしてくださいましたら、もっと末端まで子どもたちを救えるのかな、と思っております。また、おたまちゃん食堂は、メンバーの方を探しておりますので、お料理が好きとか、お子さんが好きという方がいらっしゃいましたら、是非ご連絡をくださればと思います。ご清聴ありがとうございました。

**【川勝知事】** 函南の発言者1さんが農業で、三島の発言者2さんが、食堂ということで、ちょうどピッチャーとキャッチャーのような感じで、いいコンビネーションだなと思います。たまたまこの会の前に知り合いになったということで、素晴らしいおふたりのコンビが、今日、確実に成立したことをおめでたく存じます。

発言者1さんは、野菜ソムリエというんですね。これは知りませんでした。しかも、ソムリエ6万5,000人いらっしゃる中で、全国第2位の銀メダルに輝かれたということでおめでとうございます。

パンフレットを拝見しますと、大根、にんじん、玉ねぎ、じゃがいも、ニンニク、キ

ヤベツ、白菜、レタス、ナス、キュウリ、ピーマンと、こうしたものが函南で育てられると書いてあるんですね。しかも函南は酪農が盛んですから、牛のふん、牛ふんを堆肥にするという素晴らしいアイデアで、従って非常にいい堆肥のもとで、いい野菜が育てられているということですね。ソムリエというのは選ぶ名人ということでしょうか。先ほど、生産者と消費者を結ぶと言われましたけれども、緩衝、間にあるということですね。この考え方が本当にいいと思います。どうしてかといいますと、今、こういうコロナの中で、都会の人たちは身近に物を作っている所がないので、スーパーで買うことになるんです。けれども、函南にしろ三島にしろ、こちらで採れたものを、その地域の人たちに提供するということですね。

そして発言者2さんは、そうしたものをおたまちゃん食堂という所で、子どもに提供するために仕事をされている。その子どもも、何といいますか、好き嫌いがあるとか、あるいはご家庭によって、バランスのあまり良くない食事をしている場合があるので、バランス良く食べさせるということを、子どもの時にしっかり教えることをされている。食べることは生きること、生きるとは食べることと言われましたけれども、作ることと、使うことの間いらっしやる発言者1さんと、食べることが、健康に生きていく、心身ともに健康で生きていくことにつながっているということで、生きていく基礎を言われたのではないかと思います。

「バイ・シズオカ」って、お聞きになったことがあるでしょうか。静岡の県産材を、静岡の県民の方たちが、できる限り買って生産者を励まそうという運動であります。こういうソムリエがいるということは、素晴らしい野菜が提供されているということです。そしてそれを近くの函南の人、あるいは三島の人を買う。買う楽しみというのがあると思いますね。作る楽しみと、買う楽しみの間にあるソムリエは、その両方の楽しみ方を知っていらっしやるに違いなくて、買う楽しみは、実はそれが作っている人を喜ばせる、売る喜びですね。買う楽しみを持つ消費者と、売る喜びを持たれる生産者をつなげておられるということです。これは、儲けるという話ではないですね。なるべく高くたくさん売ろうとか、なるべく安く、いいものをたくさん買って食べようというのではなくて、生産者を励まし、かつ、買った人間の心も幸せになるということです。町の人たちにいいものを提供するというのは、エコミックアニマル、ホモ・エコノミクスと逆の利他行為ですね。地域の人たちを喜ばせる運動です。それが結果的に、全国でトップクラスの銀メダルという、ご自身の喜びになっていると。作っている人たちも、発言者

1さんに任せておけば、いいものを提供できるし、買った方は楽しい。つまり、自分の利益になっているし、相手も喜ばせているということです。利他行為であり、自分を利する行為でもあるということです。自利と利他が一体となる、結ぶ仕事を発言者1さんはされていると思います。

発言者2さんは、3歳までは何とかお母様が、赤ちゃんと一緒にいられるようにするのが望ましいと。これは、ご経験から言ってらっしゃると思います。なかなかそうはいかないところもありますが、そうした時に、保育園とか幼稚園とかですね、そうした所で、お子様を教育していくということでしょうけれども。

これからの時代、都会の人達にとって、静岡は全国で2番目です。つまり、一番行きたい場所はどこか。都道府県別では1位が長野県でした。2位が静岡県です。3位が山梨県でした。4位が栃木県で5位が新潟県です。要するに、山梨、静岡、長野というのは、1位、2位、3位を独占しているわけです。どうしてか。ここは空気がきれい、食べるものもいい、体が動かせる。そして、採りたての朝採れのものが食べられるということがあるんじゃないでしょうか。こういう所こそ、人間の生きる場所として理想だということです。そして、そういう所で、どういう教育をしていったらいいかといった時に、今おっしゃったように、生きることは食べることだから、より良く生きることは、より良いものを上手に食べるという、食べ方を教えなくちゃいけないということがあった方がいいと思いますね。カロリーだけじゃなくて。発言者2さんは、なるべく助けてくれる人があればいいとおっしゃっているので、県庁の方でも募りまして、発言者2さんのおたまちゃん食堂を手伝えるボランティアの人がいれば、すぐにご紹介を申し上げます。できる限り多くの方が助けてくださるように。良いことを学ばせていただきまして、ありがとうございました。

**【発言者3】** ご紹介いただきました有限会社岩田自動車钣金工業代表の発言者3と申します。併せて、今、函南町消防団第1分団の分団長も拝命しております。会社のほうは、ちょうど今年度50年を迎えた自動車の整備工場、特に屋号に入っているとおり、自動車の事故修理をするような钣金塗装、車体整備と言われる整備を中心としております。車体整備は、お客様に事故をしてくださいという営業はできないので、お客様との接点を増やすため、私が代表となってからは、自動車の整備、販売、保険あとはロードサービス、その他多岐に渡って自動車に関わるような仕事を内製してきました。

30代の頃は、本当に仕事しかしてこなかったもので、4代になって、「頼まれ事は試され事」というように、4代になってから自分自身が地域に対して何か貢献してみたいという思いがありました。そうなった瞬間、学校のPTAの仕事や、今回の消防団の仕事がちょうど年回りで回ってきまして、自分がそういうふうにした限りはということで、2年前に函南町の消防団も拝命して、今、活動しております。

私が代表となってから、ちょうど長男が生まれた時に、自分の息子が会社を継いでみたいというような会社にしたいなと思いました。ただ、息子にやってくれと言ったことではないですが、少なくとも、継ぎたくなるような会社にしたいという思いから、私じゃなければ回らない会社ではなくて、社員たちがお客さんに頼られるような会社づくりを目指すことを、この10数年、課題として取り組んできました。その中には、消防団活動もあります。函南町の消防団というのは、本当に素晴らしい団員たちが揃っています。この消防団は、社員を育成する意味でも環境が整っていたので、今日もいるかもしれないんですが、私たちの会社の社員も分団の団員に加盟していただいて、活動しています。こんな簡単な自己紹介でよろしいでしょうか。以上です。

**【発言者4】** 皆さん、こんばんは。発言者4と申します。本日はよろしく申し上げます。

私はコンサルタントとして、民間企業や行政機関に働き方改革の支援をするということを10年以上続けています。今日は、静岡県の移住政策についてお話をしたいと思っております。私は4年前に、東京から三島市に移り住んできました。きっかけは、娘が生まれたことです。東京で保育園を探すというのは本当に難しかったです。生まれる前に、毎日のように何10件も保育園に電話をしました。その中でやっと申し込みができたマンションの一室のような小さな保育園に行くと、園長先生が持って来てくださった申し込み園児の名前が書かれたノートに、もう既に数百人の名前は書いてあるんです。最後の行に、私は自分の名前を書きました。まだ娘は生まれていませんし、名前も決まっていないからですね。そうやって、数人の枠に数百人という、本当に熾烈な競争がありました。競争するようなものではないのですが、本当に、隣同士で競争していくということです。こうやって、来るはずのない連絡をずっと待つというのが私の保育園活動、保活でした。

妻が三島市の出身で、里帰り出産をするのをきっかけに、私もこの町に2ヶ月ほど暮

らしていたんです。そうすると、本当に優しい、そして穏やかな人柄というのを実感して、ふと、夫婦ともに新幹線通勤して、この町で暮らしたらいいんじゃないかと、ひらめいたということがありました。それで、三島市役所に相談に行ったところ、大歓迎してもらえたんです。娘が生まれる前から生まれた後まで、そんなふうにも子どもの誕生を歓迎してもらえるということが、私は無かったです。4年前の出来事なのですが、その時の気持ちや、その時の風景は今でもよく覚えています。すごく基本的なことだったのですが、私にはとても嬉しかったということです。

夫婦で新幹線通勤を始めて、静岡県民になってまだ4年です。今日ご登壇の皆様のように、県民の代表といえるような立場ではないと思っていますのですが、そんな私だからこそ、今日知事にお話できることがあるかなと思っています。

今日、私がお話したいのは、静岡県の移住政策です。娘が、長女は4歳になって、今年、次女が生まれました。彼女たちの世代は、半数以上が100歳を迎えると言われていています。そうすると、父として思うことは、100年後も彼女たちが生まれ育った三島がここにあって欲しいということです。夏になったら三嶋大社で大祭りが開催されて、シャギリの音が町中に響いている状態であって欲しいなということを思っています。

そんな100年後の静岡県のために、必要なことはたった一つで、人々の暮らしがここにあるということです。つまり、人口です。これまで日本では、東京に人をずっと奪われ続けていました。でも、新型コロナウイルスの影響によって、やっと東京から人を取り返すチャンスが来ていますよね。このチャンスに気付いて、チャンスを掴もうとしているのは静岡県だけではなくて、先ほど知事のお話にもあった長野、群馬、栃木、茨城、千葉、それだけではなくて、もっと遠くの自治体、日本中の自治体が、東京の子育て世代を狙っています。例えば、千葉県の流山市のホームページを見てみてください。大きくそこに書いてある言葉は、「都心から一番近い森のまち」です。市民に向けたメッセージじゃないですね。東京に向けて大きな声で宣伝をしているんです。そうやって、みんなが東京の子育て世代を集めようとしている中で、静岡県として、知事が何をすべきかなと考えました。やるべきことは二つあると思います。一つ目は、今すぐにやった方がいいと思うのですが、保育園と放課後児童クラブへの入所を保証することです。つまり、静岡県は、保育園と学童保育は100パーセント入所できますと、入所率100パーセントですとPRすることです。移住を検討している子育て世代の最大の関心事は保育園に入れるか、学童に入れるかなんです。私も移住者なので、いろんなところに載っているん



ですが、そうするとSNSを通じて、いろんな人から相談が来ます。必ず聞かれる質問は、「発言者4さん、三島の保育園ってどう？入れる？」です。そして、他の自治体が持っていないくて、静岡県だけが持っている強みもあると思います。最も強いカードです。それは、後戻りできる移住が出来るということです。移住というと、仕事を夫婦ともに変え、暮らしを変えて、転校もして、という、人生の大転換を求めますね。でも静岡県であれば、仕事を変えずに住まいだけを変えるという移住ができるんです。引っ越した先が合わなければ、また引っ越せばいいじゃないかという、気軽な移住が出来るところが最大のメリットだと思っています。例えば、三島駅から45分の場所には品川駅がありますけれども、品川の周辺には世界を代表する名だたる大企業の本社があります。その従業員たちは、今日も感染リスクを負いながら、片道1時間かけて出社しているわけですね。彼らが仕事を変えずに住まいだけを変えるという移住が、静岡であれば出来るという強みがあります。夫婦ともに毎日新幹線通勤をすることが可能だということは、私たち夫婦が4年間をかけて実証済みです。この後、テレワークがもっと加速していけば、ハードルはもっともっと低くなって行って、彼らにも、後戻りできる移住が、静岡への移住が出来るのではないかと思います。ただ、彼らもこの町に住んだら、この町の魅力が分かって、私のように気軽な移住だったつもりのはずが、ずっと定住するということがあるだろうなと思っています。だからこそ、他の自治体がやり始める前に、静岡県が入所率100パーセントを始めることが必要かなと思います。ちなみに、待機児童ゼロの宣伝では効果がありません。入所率100パーセントという、言葉が大変重要です。ひょっとすると長野県知事が、この観点にもう気付いていて、明日発表するかもしれないんです。そうすると東京の人たちは明日以降ですね、軽井沢に引越そうと思ってしまうんです。あるいは今夜、流山市のホームページを見ながら、夫婦で話し合っ流山に行こうと決めた家族がいたとします。流山や軽井沢に移った人達を、静岡に呼ぶことは、もうできなくなってしまいます。なので、今すぐに宣言をした方がいいと思っています。

二つ目の知事へのご提案は、私を静岡県の移住政策アドバイザーにするということです。ここ、笑うところですね。例えば、ということですが。就任してからいっぱいお話ししたいなと思っています。そんな役職はないというご反応もあるかもしれませんが、まず役職を作るところから、是非ご検討ください。

最後に、ここに今日ご登壇の皆様も、お集まりの皆様も、誰もが100年後も静岡が賑わっている、というのは願っていると思うんです。今、移住政策を転換させないと、100

年後の三島には本当に人がいなくなります。日本全体で人口が減るので、本当にいなくなるんです。不便になった町からは、人がどんどん出ていってしまうからです。そうになると、三島の大祭りがなくなったり、シャギリの音が響かない夏が100年後にやってきてしまうんです。私はまだ4年目の県民ですけども、そんな夏は、今年だけにしたいなと心から本当に思っています。今日はありがとうございました。

【川勝知事】 まず発言者3さん、40代になったら頼られることが大事だということで、文字どおり皆が頼る消防団の分団長になっていただきまして、誠にありがとうございます。今、消防団は、静岡県で2万人ぐらいいらっしゃるんですけども、なるべく事業所の方たちに入っていたきたいと、いろいろな便宜も図っているんですけども、社員の方が消防団員になっているのは、本当にそのモデルになるもので、発言者3哲学ですね。これを学んで、発言者3さんの所でやっているのだから、他の所もできようというふうに宣伝をしたいと思いました。

そして、発言者3さんの哲学を支えているのは、お坊ちゃんだということが分かりました。息子が発言者3さんの背中を見ながら、俺の後を継いでくれるかなと。しかし、継げとは言わない。子どもが見て、決して恥ずかしくない、そういう生き方をしようという、それが発言者3さんの自動車会社ですね。钣金会社ですか。その会社に脈打つ哲学じゃないかと思いました。先ほどは、お母さんとお子様の話でありましたけれども、父と息子と言いますか、父と子の関係も極めて重要です。父を亡くしますと、たとえどんなに歳をいっていても、大きな大きな空白が生まれます。やっぱり子どもは父を見ているんですね。特に男の子はそうだと思います。そのことを意識して、学校の先生だけじゃない、自分もまた、子どもの鏡になれるようにという姿勢が、社員の方々に共有され、皆喜んで、消防団員になっているということじゃないかと思いますね。

さっきの発言者1さんもそうですけれど、函南はいい所なんですね、立派な人を生む、そういう風土があるんでしょうか。やっぱりゲートウェイがあるんじゃないかと。伊豆半島へのですね。道の駅も、川の駅もできて、おめでとうございます。

子育てを大事にし、仕事一筋よりも、社員、また社員の家族、それから自分の家族は言うまでもありませんけども、そして食育だとか、そういうことに熱心な女性もいらっしゃるということですね。そしてサラリーマンが、時間が空けば小作でもして、要するに土地を持たないで借りて、ソムリエなどのご指導をいただきながら野菜づくりをする。

自分で作る。それほどの楽しみはないんじゃないかと思います。特に都会の人にはそうじゃないかと思います。

発言者4さんからは、移住アドバイザーにと。なってください。もう移住アドバイザーですね。ただ、私どもは、実は山梨県や長野県と一緒にオフィスを構えておりまして、東京の方、あるいは横浜の方、あるいは品川の方でもそうですが、長野県と静岡県と山梨県で、それぞれ山が好きな人、海が好きな人、あるいは里が好きな人、いろんな人がいらっしゃって、その選択肢を増やすために、取り合いはしないことにしています。選択肢を一緒に供給しようということです。当初は、自分の県に来るようにという、取り合いの感じがあったんです。それをやめて、むしろ選択肢を一緒に提供しませんかということで、まず山梨県で始めました。今、山梨県とは「ふじのくに」ということで、うちは表玄関、あちら奥座敷という言い方で一緒にやっています。その方が東京の人にとっては、いろんな選択肢が増えるのでいいのではないかと考えております。

しかしながら、お子様が生まれて、入所率100パーセントという、これは基本的には市町の仕事になりますけれども、我々はいろんな形でそれを支援するというところでございます。そして、移住先ですね。実際、発言者4さんの場合には、縁があつてこちらに来て、こちらにお住まいになって東京で仕事をされている。2つの地域に関係している人口という、そういう住まい方をされているわけですね。仕事を変えなくていいと。

そのうちに、こちらでも仕事ができる時代が来るかもしれません。住まいの中に、子どももいるし、家族もいる。だけど、仕事をしている時は、たとえ1畳でも、場合によっては半畳でも、自分の机とパソコンと、しかるべき書類が置ける場所がある。1畳あれば十分かもしれません。日常の、食卓やお茶の間のテーブルでやっているのではなく、その空間にいる時は、お父さん、お母さんは仕事をしているということですね。静岡県では、仕事場を家の中に持てるよというふうにすると、オンラインで、あるいはWebを使いながら仕事が出来やすくなります。

今の東京の住まい方は、2DKから始まりました。お父さんの部屋と、子どもの部屋と、台所とダイニングですね。仕事のことは入っていないんですよ。だけど、静岡県あるいは山梨県でも長野県でもそうですけれども、やろうと思えば、生活の場とオフィス、仕事場を持てるということです。例えば、内職をしている方たち、家内工業をやっている人たちは、生活をしながらそこで仕事をしていたわけですね。ですから、そういう場所を持つような住まいを提供できれば、地域で仕事出来るようになるんじゃないかと思

ます。

それからもう一つ、やっぱり東京、あるいは大都会は、食べるものに困る。ここはたくさん野菜が作られていますけれども、じゃがいもでもちょっと作れば自分で食べきれないぐらいできますので、差し当たって失業しても食べるものに困らないのが、この東部地域、伊豆地域であろうと思います。その意味では理想的なんですよ。どこを選ぶかは、同じ日本人ですから、特段自分の所が一番だと言う必要はないと私は思います。それが何て言いますか、おっとりとした静岡県民的なところですね。

それから皆様方、今、12万人位の感染者が出ています。そのうち、東京だけで3万5千人位です。言い換えると3分の1弱ですね。神奈川県は1万4～5千人です。埼玉県、千葉県を合わせますと、優に5万件を超えています。半分位が実は首都圏なんです。それから、愛知県だけで1万人弱です。大阪は1万5～6千人です。兵庫県と京都府を入れると、首都圏と愛知と京阪神で8割位を占めています。大都会は今、感染源になっているんです。大都会に住まわれている人は皆、この不安に非常に怯えていらっしゃる。だから出たがっていらっしゃる。じゃあ、どういうふうに、その方たちに安心してこちらに来てもらえるかを考えたほうがいいと思っています。発言者4さんの場合は、三島からご夫妻で通っていらっしゃる。確かに、新幹線の最終列車は三島駅ですからね。ですからここは最適な場所、最適の玄関口であると思います。東部並びに伊豆半島への玄関口という地の利がここにあると思うんですよ。

東京の方たちにとって、あるいは人間の生き方として最高の理想は何か。子どもを安心して育てられる、生きることと食べることが一体だと、それから、儲けよう儲けようというのではなくて、地域コミュニティの役に立ちたいということ。結果的にそれが自分の生きる糧にもなって、お金も入ってくる。お金が回るわけですね。こういう地域づくりが、ここなら出来ると思うんですよ。そうした中、頼られる人間になるにはどうしたらいいか。学校の先生に任せず、親がちゃんと子どもに対して、鏡になれるようにやる、そういう生き方が望ましい。これは発言者3さんがやっていらっしゃることだと思います。

男女2人ずつで、この理想形みたいなものが見えてきましたね。21世紀の時代の、あるべき暮らし方・働き方というのが見えてきたなと思います。発言者4さんは、既にいろんなアドバイザーをしているんじゃないでしょうか。アドバイザー会議の中で、特に必要なのは移住アドバイザーじゃないかと思います。それぞれ、自分の本当にやりたい

ことが、他の人たちの役に立つのであれば、それは還元したらいいんじゃないかと思っています。

浜松と静岡。浜松も静岡も、実は札幌より広いんですよ。それくらい大きな所です。今、(新型コロナウイルス感染者が) 900人ぐらい出てきましたけれども、半分以上そこで出ているんです。浜松といっても天竜のあたりは全然出ていません。静岡でも井川という奥静の所は出ていませんけれども、繁華街で出ているんですね。ですから、日本全体の縮図みたいなのところがあるんです。そういう意味で言うと、例えば、熱海とか伊東は、東京圏から近いから出ていると思われるでしょう。低いですよ。ああいう観光客が来ている所でも低いんです。それは、コミュニティがあって、お互いに気を付けているからなんです。静岡県のホームページ見ていただきますと、色分けしてありますから、(感染状況は) すぐ分かります。感染症に対するエチケットを、皆、守るんですね。そういう地域は、私から見ると誇るに足る地域だと思います。

ちなみに、この隣の長泉に、がんセンターがございましょう。その総長が、東京や神奈川と愛知県の間にある静岡県で、亡くなられた方が少ないのには3つ要因があると言われました。1位が、県民の賢さだと。それから医療がしっかりしていると。そして地方行政がしっかりしていると。1番に挙げられたのが、県民の賢さだったんですよ。それが静岡の謎を解く答えだとおっしゃっています。専門家が言っているので、今、第3波の真っ只中にありますが、特に我々は、その中でよく気を付けて、コミュニティを一緒に守り合うということです。利他の精神と、利他が自分の利益にもなるという、自利と利他の、コミュニティーのホモ・シビックスとでも言いますか、ホモ・エコノミクスという経済人ではなくて、公共性が非常に高い、自助、共助、公助、これらが一つになったような生き方をしている人が多いということじゃないかと思っています。今こそ、三島市あるいは函南町民のコミュニティー力が発揮される、発揮すべき時ではないかと思っています。まさに危機の中ですから。

そうした中で、発言者4さんは、4年目にして自分自身がモデルであるように、ここは住まうに値する所で、素晴らしいと。だから、もっと素晴らしいと言えと言っていたので、後押ししていただいた気がします。それから三島の発言者2さんも、子どものためにやっていらっしゃるので、これは都会のコンクリートの世界ではできないことですね。これから本当に価値が変わるのを感じました。ありがとうございました。

【発言者1】 これから先、行きたいのは、先ほどもちらっと触れさせていただいたのですが、農業体験と一緒にやっていきたいなと思っているんですね。函南町丹那は本当に自然豊かで、すごくきれいな所です。山もすぐにそばにあって。そういった自然を残しながら、その自然を大切にして、次世代の子どもたちに残したい。農業と一緒にやっていただいて、農業活動をしていただいて。先ほどちょっと移住の話が出ましたが、函南町丹那もダイヤランドとって、別荘地があります。今、そこはちょっと空いてるそうなので、都会の方をそちらに呼んで、一緒に農業をやって、函南町丹那をもっと活性化させたいなと思っています。

【発言者2】 おたまちゃん食堂は、今後、子どもたちが住みやすい場所を、三島市を作っていきたいなと思っています。移住の話もありましたけれども、その時に、三島に行くと子どももすごい幸せなんだよっていう噂が立つぐらい、皆で支援をしていきたいと思っています。それには、幸せな、明るい部分だけではなくて、例えばシングルになってしまったとして、でも三島に行くと、本当に皆さんバックアップしてくれて、いいですよ、だからあそこだと頑張れますよってというような場所を、どんどん作っていきたいと思っています。先ほど、ちょっと発言者1さんともお話したんですけども、農家の方が一生懸命作ってくださったお野菜を無駄にしないように、破棄食材が多いということも聞きましたので、それらを、支援をしている方たちにお分けしてもらって、それをまた子どもたちの食へとつないでいく。そして、子どもたちには、ただ食べるのではなくて、どんな方が作ってくださって、どれだけ日にちがかかって、時間がかかって、みんなの口に入るんだよってことをちゃんとお伝えしながら、子どもたちに教えていきたいと考えております。

【発言者3】 消防団活動にも繋がるのですが、自動車整備の技術というのは、私自身、素晴らしいものだと思います。この素晴らしい技術を知ってもらうために、車という商材で、例えば、先ほど言った車検整備とか、保険やロードサービスだけだと、あくまで車でしかないもので、私たちともっともっと触れ合ってもらうような接点を何か作ろうと、函南町の人達だったら誰でも知っているような企業さんとコラボしています。

私も実は発言者1さんのいらっしゃる丹那で商売させていただいているんですが、そちらの山あいが、パラグライダー好きな方たちには、すごく有名な場所みたいなので、

その企業とコラボした「空飛ぶ車検」というのをやっています。私たちの会社で車検をすると空を飛べるんです。また、「乳搾り車検」といって、私たちの会社で車検をやるとう乳が搾れるとか。それぞれの企業で、素晴らしいいろんな体験ができます。誰でもあまりやりたくない車検を、ちょっと楽しいものに転換しようということで、函南町にある様々な企業とコラボして、そこを楽しむためのついでに車検みたいな形にしています。

車検のチラシでは、早かったり、安かったりに特化しがちですが、私自身、技術というのはもっと尊いものだと思っています。この技術を知ってもらうためには、地域の企業と一緒にあって、私たちを知っていただくよう応援していただき、触れ合うことだと思っています。触れ合って初めて技術の素晴らしさを知っていただくことができるのですが、そのチャンスがないと、どんなに素晴らしいものを持っていても、なかなか知っていただくことができません。それぞれの企業がお客さんを持っていますので、チラシ1枚を見て、車のことなら相談いただけるように、地域でコラボし、地域を活性化していこうとするものです。そして、これを評価できる素晴らしいお客様たちが集まり、集まっていたらいいような印象を受けます。

事故修理は素晴らしいものだけれど、分かりにくい。要は、興味や関心がないんですよ。買った所にとりあえず持っていこう、ディーラーに持っていこうというお客様が多いと思います。そこで、私たちを知っていただくために、地域のコラボや様々な工夫をしながら会社を運営しているんですが、消防団に入った時も全く同じです。先ほど言ったように、本当に素晴らしい団員たちが揃っています。操法の大会や、火災・災害の対応ももちろんするのですが、その他に、例えば堤防の草が大人の背ほど高くなってしまって困っているということがありました。子どもたちの通学路だったので、不審者がその草むらの中に隠れて万が一のことがあるかもしれないと、その地域の方たちは草を刈りたいと思っていました。でも高齢化して、なかなか刈れない。その情報を、私たちの消防団の管轄区で聞き、団員全員でその草を刈ったりしました。

また、先日は町で音頭を取っていただき、小学校で防災キャンプを行いました。防災知識・能力、例えばポンプ車で水を出してみるとか、そういったことを子どもたちと一緒に楽しみながらやるものです。（コロナ禍で）キャンプがなくなり、子どもたちが寂しがっている、それを何か私達で埋めることができないかということで、防災キャンプを実現しました。

以前、私が入団した時の消防団と比べ、今は入ってくる入団者もない中、消防団を

知ってもらうために創意工夫をするのは、会社の活動と全く同じです。そして、これまでやったことのないような活動を、消防団の本部や函南町は柔軟に受け入れてくれました。そうした町の姿勢に私自身も感銘を受けましたし、消防団は自ら進んで積極的に取り組む、そういう団なので、社員にも、この団に触れ合ってもらって、人としても育ててもらいたいと思います。

先ほどの発言者4さんは移住者だとおっしゃっていましたが、実は団員も、県外から入って来ています。消防団というのは、本当に地元のつながりが強いので、地元に触れ合ってもらうために団員になってもらっています。その団員は今、私以上に地元民として、地元の先輩や後輩、同期の子たちと仲良くさせてもらい、非常に楽しんでいると思います。

**【発言者4】** 知事がおっしゃったとおり、山梨県や長野県と連携してやっていくことは本当に必要です。私がすごく危機感を持っているのは、移住先として静岡県が頭に思い浮かばないことなんです。移住って聞いた時に、パッと出て来ないんです。山が好きな人は自然豊かな長野を思い浮かべ、海が好きな人は茅ヶ崎でサーフィンしたいとか、千葉に行きたいとか、房総半島と思うんですね。その時に、静岡県は出て来ないんです。今年の夏に雑誌で移住先ランキングというのが発表されていて、長野県も山梨県も千葉県も、たくさんの自治体がランキングで点数化されて載っているんです。静岡はどこかなと思って探してみると、1個だけですね。あの町です。長泉町だけなんです。

となると、そもそも候補として頭に思い浮かべる人が少ないんじゃないかということなので、独自性のあるスパイシーなPRを是非知事から全国に向けて発信いただきたいなと。各自治体がそれぞれに、長泉町がやって、三島がやって、ということではなくて、県全部でとか、東部全体で広域に連携してPRできるといいなというのが、アイデアでございます。

**【川勝知事】** もう感心して聞いていましたよ。発言者1さんと発言者2さんは、素晴らしいペアですね。農業体験を子どもたちにさせたいとおっしゃっているし、子どもたちが安心して来られるような場所も作りたいとおっしゃっているんですが、体を動かすのが子どもですからね。農業体験は、学校の教室の勉強と違う。しかも1回やると忘れられないし、収穫すれば、その喜びがありますからね。土に親しむことができるのが、



この地域のメリットだと思いますから、これを教育課程に入るようにできればいいですね。学習指導要領にはそういうことは書いてありません。ですから、函南町や三島市、あるいはこの地域、東部では、農業体験をするのが当たり前になるといい。三島のお芋は日本トップクラスです。立派な野菜を作っている所なので、子どもも誇りを持って、そういう体験が出来るようにするのがいいんじゃないかと思います。何かプログラム作りみたいな、もし何か考えがあれば、お助けしたいと思います。

発言者3さんは大したものですね。車検と合わせてやっていく「選べる素敵体験in函南」。飛ぶ、食べる、なごむ、癒し、食べる、作る、搾る、空へと。そしてこの地域の企業を結びつけるというのは、先ほどの、空いている別荘を使って農業体験をやったらどうかというのと似たようなところがあって、函南にあるいろいろな企業を結びつける媒体になっているということですね。

また、消防団にいろいろな公共的な仕事をお任せして、結果的に子どもの防災に役に立っていると。そして防災キャンプですか。これは子どもにとっては、忘れられないですね。子ども時代の思い出にもなるし、防災力はつくわけですし。そういう一石二鳥、三鳥の役割をいろいろ思い付かれ、しかも自然体でなさっておられるので、感心して聞いていました。

それから発言者4さん、PR力不足ですみません。能力不足ということで、発言者4さんのアドバイザー力を借りながら、PRをしていきたいと思います。移住＝西側＝静岡だ、富士山のふもとだ、あるいは海が見える伊豆半島だ、というイメージがスーッと浮かぶようにしたいと思っておりますし、おそらくこの地域の人たちはみんな同じように思っていると思います。思いは同じでも、それが形になっていないのは駄目だと、厳しいご指摘を受けましたので、PRが下手だということで、その辺りの知恵を是非お借りして、PRしていきたいと思います。ありがとうございました。

【傍聴者1】 私は函南町の傍聴者1と申します。先ほどから何度か話題に出ているダイヤモンドに14年ほど前から住んで、プログラマーとしてテレワークでやっております。自然豊かな所で快適な仕事をして、大変素敵な、幸せな人生を送っております。来年還暦ですが、歳は関係ないですね、テレワークは。そういう意味でも大変素晴らしいと思います。とても幸せです。

ところが、その丹那に、今、大変な問題が起きています。巨大なメガソーラーが作ら

れようとしている。そこは県のハザードマップにも大きく掛かる危険な地域です。ですから、町長も副町長も、町民も当然反対です。ところが、町長は計画を止めるための条例を適用できないと言っています。その理由は、県が、既に林地開発許可を下ろしているからだと言っています。昨日、事業者の住民説明会があったのですが、その中でも、県の許可が下りているから安全性については問題ない、安全は保障されていると言っています。そこで私は、川勝さんにお聞きしたいのですが、県は、町民の意見を無視して、危険な計画を許可したのでしょうか。どうなのでしょう。お答えください。

【川勝知事】 伊東で一度、メガソーラーの問題がありまして、最終的に住民の方々の意見が通りました。私どもも、それを支持いたしました。今、残念ながら裁判中ですが、私どもは、市民イコール町民イコール県民ですからね。その方たちの意向を無視するようなことはできません。一方で、森林法と言いますか、法律がありまして、私たちの権限は限られていますので、それにいろいろな付帯条件を付けることしかできないということがあります。ですから、県が認めているという形で整理できるものではなくて、そう簡単に事業者が事業に乗り出せるようにはなっていないはず。あるいは、そういうふうにはさせていないはず。

いろいろな付帯条件を付けても、一定の条件があると、ノーと言えない、そういう法律的な規定がございます。しかし、例えば市民の方たち、町民の方たちが反対されているので、これについてきちっと理解を得るようななどの付帯条件ですね。そういうことを通して、皆さんと寄り添ってやっているというのが実態です。認めているというのは違いますので、今度、傍聴者1さんのところにご説明に上がります。この件については、関係者があなたのところに行って、我々のやっていることも是非ご説明をさせていただきます。

【傍聴者2】 三島市に住んでおります傍聴者2と申します。よろしく申し上げます。楽しいお話というか、とてもためになるお話をいろいろとお聞かせいただいております。今日、始まる前に、静岡県のパンフレットを拝見していて、「誰もが努力すれば人生の夢がかなう日本」、あるいは、「外国人県民も安心して暮らせる環境の整備」というビジョンが掲げられていて、とても心を強くいたしました。また、今回、意見を言える場をありがとうございます。

私が伺いたいことは、今後増えるであろう外国人の労働者の方々の子どもたちの教育についてです。静岡県では、昨年度からですか、「外国人生徒みらいサポート」という事業をやっていただいております。実は私も縁があって参加していただかせて、外国人生徒のキャリア支援をさせていただいております。その中で、多くの外国人生徒の方たちが、自分の能力に気が付いて、可能性に気が付いて、夢を持って頑張っています。日本人の生徒とも関係を持って上手くやっています。非常にいい事業だなと思っているのですが、彼らが一番気にしていること、胸を痛めていることは、自分たちは高校に来られたけれども、来られなかった仲間たちの存在です。

日本語がちょっと不足、あるいは学力が不足、あるいはそういうルートがあることすら知らなかったという子たちが多いんですね。私が担当している子たちの多くは、たまたま偶然、ボランティアの方と出会って、そして、高校へ進むことができたんですね。非常に偶然性の高いことで、もしそれがなかったら、今、自分たちは工場で働いていると言っていました。

なので、私からお願いしたいのは、今、県のほうで進められていると思いますけれども、夜間中学の早期の開始です。夜間中学を設置するということで、今、慎重に審議を重ねていらっしゃるかと思うんですけれども、なるべく早い実施をお願いしたいと思っています。中学というと、管轄がどうしても市町みたいな感じになってしまうんですけれども、市町は専門性も不足しますし、時間もかかってしまうので、県立高校とか、県の施設を有効活用していただいて、県で早急に進めていただけたらなと思っています。

もう一つは窓口です。知っている子だけが行けるということであってはいけないと思います。日本に来る外国人の、労働者のお子さん方がどういうルートで日本で学ぶことが可能なかを平等にアナウンスできる場が必要になると思いますので、是非、県でそういった窓口を作っていただきたいと思います。掲げられているようなビジョンが達成できるよう、是非、お願いしたいと思います。

**【川勝知事】** 大事なお話、ありがとうございました。今、静岡県民は370万人ですけれども、10万人余りが外国人の方たちです。今、感染症で、それこそ日本人の方に比べると、ハンディキャップをお持ちですよね。その方たちが困らないように、最善の力を尽くしております。例えば、一番多いブラジル人の方は、3万2千人位いらっしゃるんですけれども、1人も感染者が出ていません。今、19カ国語に対応して、困ったことの

対応をしているということです。これは、多文化共生を担当している理事が窓口です。今、申しあげました19カ国語の窓口は24時間対応しているはずです。

それから学校ですね。言うまでもなく、静岡県の方針は、静岡にお住まいの方は、宗教とか人種とか、文化とか、肌の色とか一切関係なく、皆同じく県民として扱うということです。例えば、食文化でハラールというムスリムの方たちもいらっしゃいますけれども、最近、モスクも一つ作られました。これは静岡市でございますけれども。その方たちは豚肉だとか、アルコールを使った調味料は食べられないわけですね。だけど、日本人の中にもアレルギー体質をお持ちの方とか、いろいろいらっしゃるの、同じことだということです。食事に苦勞しないようにと、県でも取り組んでいるわけです。

一方、一番困るのは日本語ですので、日本語をなるべく早くマスターできるように、様々な取組をしているんですが、今、おっしゃった夜間中学と申しますか、昼働いて、何とか中学レベルの学習能力をつけるようにというのは、もっともなご提言だと思っております。今、どんどん子どもが減っているの、空いている学校がありますから、そうしたものをどう使うかとともに、おっしゃるように、これは市町の教育委員会のことでもあります。

教育については、教育委員会がございますが、社会総がかり、地域ぐるみでやる、総合教育会議というのがあります。首長と教育委員会の会議で、そこで意見を言うということです。県でも教育委員会とともに私が出ます。私が出る場合、私の意見は言いません。地域自立のための「人づくり・学校づくり実践委員会」というのを、もう5年くらい続けておまして、農業者の方、芸術家の方、スポーツの方、生産者の方、いろんな人に入らせていただいています。その人たちの意見を私が聞いて、そして総合教育会議に行き、その意見を私が言うのではなく、実践委員会の委員長若しくは副委員長の方に言っていただいて、教育委員会が実践する。おそらく全国の中で、これほどきちっとやっている所はないと思うんですよ。社会総がかり、地域ぐるみで皆の人たちを助けると申しますか、教育する。外国人もそのうちのひとつで、いろいろなハンディキャップを持っている人たちも、同じように差別がないように育てていきたいと思っております。ただ、語学などは、一気に解決するものではないので、時間がかかると同時に、きちっとしたシステムを作らなきゃいけないと思っております。早急な解決策というのはないんですけど、夜間中学という形で、15歳以上の方もそこで学べるようにするというの、前から出ている案件でもありますので、どう実現するかと、今、様々に悩んでおりますが、

何とか早く実践に移して、先生にも安心していただけるようにしたいと思います。中途半端な回答で申し訳ありません。

【傍聴者3】 函南町から参りました傍聴者3と申します。どうぞよろしくお願いいたします。私も移住者です。8年前に大阪から移住して参りました。ここの良さは、お住まいの方たちは気付かない、灯台下暗しのように気付かないことが多いと思いますが、私は第2の人生ここしかないという思いで、8年前に来ました。この8年間の生活、とても心豊かに生活させていただきました。丹那の方々にとても優しく親切に向き合っていて、移住者によくある孤独感、全くありませんでした。そして、ここを選んだ理由、これはやはり交通の便がいい。高速道路が2本走っていて、新幹線も停まる。そして日本屈指の、ナンバーワンのがんセンターがある。そういう社会的インフラが整っている。おまけに、日本の代表すべき富士山、そして他の日本のどの地域よりも優れた歴史文化を持っている。こんな素晴らしい所はない。本当に、私はここに移住してきて良かったと思っております。

ただ、先ほどの方が言われたように、大変な問題が起こっておりまして、丹那の方々に1年半前に相談を受けました。それはとても深刻な、悲壮な相談でした。あの丹那の山に、ディズニーランドに匹敵するような超巨大メガソーラーが建設されようとしていると。あそこは火山灰で、過去に土石流による被害者が多く出ている場所ですので、あんな所にできたら、直下に住む丹那軽井沢の方々は生きていけない。丹那小学校の方も、子どもを通わせております父兄の方も、深刻に悩んで私のところに相談に参りました。私は、これだけお世話になった方々の相談に背中を向けるわけにいかないという思いで、微力ながらこの問題に向き合うことにしました。

調べれば調べるほど危険なんですね。去年の台風19号で実証されたように、この被害は駿河湾まで及びます。知事に是非お願いしたいんですけども、これは環境アセスの対象事案になっております。私は事業者、また県の生活環境課長にもそれぞれ伝えております。現場から駿河湾まで広域に、台風19号で被害に遭われた方々の地域全てを、環境アセスの対象エリアとして調べてもらいたい。土石流や水害の被害に遭わないのか、そういったところは、県所管の条例になります。アセスという法律も条例も、少しは理解しているつもりです。知事には出来ることと出来ないことがあるのも理解しております。ただ、私たちは、知事のリニアモーターカーに対する向き合い方をとても尊敬して

おります。県民の命を守る、そのためには国とも正々堂々と渡り合う姿は県民の誇りだと思います。

この伊豆半島のメガソーラーで悩んでいる住民が多くいることもご承知だと思うんですけども、一部の方々は「知事はリニアカー問題はすごく熱心だけど、メガソーラーの関係はあまり関心をお持ちでないのかな」と言う。私は「そういうことは絶対ない」と、そういう話はよくします。ですから、知事に出来ることと出来ないことを分かった上でお願いしております。是非ともこの問題について、知事として向き合っていただきたい。私たちは、この小さな町で2万人以上の署名をいただいております。過去2回、知事にお持ちしましたが、副知事の対応ということで、知事に直接地域の方々の思いをお伝えすることは叶いませんでした。次の機会には、是非とも知事とお会いして、現場の窮状をお伝えしたいと思います。今日は時間の制限がありますので、お話はこれで終わらせていただきますが、是非とも、次は、川勝知事にしっかり現場の声を届けたいと思いますので、どうぞよろしく申し上げます。

**【川勝知事】** これは法律がまずいんです。私は基本的に反対しています。かといって、それで通せないのがつらいところであります。反対してください。強く。そして、事業者が決めてから環境アセスをするというやり方を変えないといけないと思っています。あなたがおっしゃったように、まず環境アセスをきちっとして、ここは作っていい所、作っていけない所ということを決めた上でしないと、今のよう、原発からいわゆる自然再生エネルギーへという大きな流れの中で、太陽に恵まれた日本は、太陽光ということで、気が付いたらメガソーラーと。そしてメガソーラーが環境、また景観、これに大きな害を及ぼすということで、伊東では、今の伊東市長と共闘しながら、何とか条例で食い止めるところまで来たわけですね。にもかかわらず、事業者は引こうとしない。今、それが函南で起こっているということですから、これは法律の不備も含めてですけども、皆さんが大きな声を上げないと。泣き寝入りしてはなりません。ですから、言い続けてください。そして何とか阻止できるように、私の方も微力を尽くすということをお約束します。

**【川勝知事】** 時間が超過いたしましたけれども、熱心な皆様方のご参加をいただき、また今日は函南から、また三島から、男女おふたりずつ素晴らしいご意見をいただきまして、

本当にありがとうございました。感銘を受けました。行政は皆さんのためにやっているわけですから、パブリック・サーバントですからね。そういう原点を忘れないように、こういう方たちと同じように、皆さん方に役に立つように、私も働きたいと思います。県庁の職員も来ておりますが、同じ気持ちでいると思います。傍聴者1さんと傍聴者3さんから出た問題につきましては、今この地域のホットな問題だということは、よく分かっておりましたけれども、今日、再確認したところでございます。ありがとうございました。皆様方、遅くまで本当にありがとうございました。どうぞ気を付けて、感染しないようにしてくださいませ。ありがとうございました。